

能代高 地域課題の解決策探る

1年生が 12月に成果発表
探究活動



立大の教員が講話した。市からは総合政策課や農業振興課、商工業振興課など9課の職員が来校。ツーリズムの領域では観光振興課の職員が「地域の現状と課題について」の「ツーリズム」の視点から「観光の現状」と題して観光の現状と課題を説明した。

能代高(山田浩充校長)の1年生192人が今年度の「探究活動」のスタートを切った。このほど市職員や大学教員を招いた講演会が開かれ、生徒たちは市の課題を学び、課題解決の糸口を探った。

同校は夢と志を持った生徒の育成を目指すキャリア教育「ニューウィルプロジェクト」を平成30年度から導入。全校生徒を対象に専門家を講師に迎えた講演会を開いているほか、地域課題や解決策を調査・研究するためのフィールドワークなどに取り組んでいる。

このうち1年生は▽アグリ▽グリーン▽ヘルス▽ライフ▽ツーリズムの5領域に分かれ、5、6人程度の班ごとにテーマを設定して活動。12月に予定している成果発表会に向けて調査を行い、地域課題の解決策を提言する。

今年度初日は、各班のテーマ設定の参考にしてもらおうと、市職員と秋田大、県

立大の教員が講話した。市からは総合政策課や農業振興課、商工業振興課など9課の職員が来校。ツーリズムの領域では観光振興課の職員が「地域の現状と課題について」の「ツーリズム」の視点から「観光の現状」と題して観光の現状と課題を説明した。

職員は課題として、▽能代が観光地としての性質を持っていなかった▽訪日外国人の誘客整備ができていない――などを挙げた上で「訪問目的や目的地、国内外からの観光客など多様化する中、それらに応えた活動をしなければならぬ。そのためには能代市が単独で取り組むのではなく、山本郡の3町をはじめ、周辺の自治体との連携も大事」と話した。

一方、アグリ領域では市農業振興課職員の説明に続き、県立大の高津英俊助教(農業経営学)がウェブ会議ソフト「Zoom」を活用して6次産業について国内の先進事例を交えながら紹介。高津助教は気候変動や世界的な人口増などを踏まえ、今後は食料生産能力をどのように保持していくかが課題」と指摘し、6次産業への切り口として「Think Globally, Act Locally(地球規模で考え、地域から変えていく)」が必要とした。

ツーリズム領域のシティセールス分野で調査を進めるという小林虎士郎君は「観光客を招くためには情報の発信方法を工夫する必要があると感じた。良い提案ができるように頑張りたい」と話した。

能代高 地域課題解決へ提言

1年生、探究活動の発表会



1年間の探究活動の成果を発表する生徒たち(能代高で)

能代高(山田浩充校長)で16日、1年生の探究活動成果発表会が開かれた。生徒たちは能代山本が抱える課題について高校生の視点から解決策を提言。古里の将来を担う一人としての意識を高めた。

探究活動は同校が展開するキャリア教育「ニュー・ウィル・プロジェクト」の中心となる活動の一つで、1年生はグループごと、2年生は個人で地域課題解決や自らの進路実現に向けた学習を行う。

このうち1年生は▽アグリ▽グリーン▽ヘルス▽ライフ▽ツーリズムの5領域に分かれて活動。行政職員や大学教員、地域住民らへの聞き取りや現地調査などを行い、地域の実態把握と課題解決への具体策を取りまとめた。

発表会は領域ごとに分かれて実施。「ライフ」では7グループが中心市街地の活

性化や防災、古里の魅力発信などのテーマで発表した。このうち渡部遥さんのグループは「島町の活性化のために一人一人の意識・行動が大きな変化を生む」と題して活動成果を披露した。能代市島町は空き店舗が多いことから市内の高校生や地域住民有志が地元食材を用いたメニューを提供するカフェの開店を提案。「高校生にできることは限られるが、少しずつでも積極的に行動していくことが中心市街地活性化の第一歩につながると思う」とした。

外部アドバイザーを務めた秋田大教育文化学部の和泉浩教授(社会学)は県内で多くの高校生が地域で積極的に活動していることを挙げ「高校生でも地域のためにできることはたくさんある。多くの人と関わり合っていく姿勢が大切」とアドバイスした。

同校では、来年1月20日に各領域・分野の代表生徒・グループによる1、2年生合同の「優秀発表会」を予定している。